

9年間の「いまとみらい科」で 将来に結び付く社会参画力を育む

大阪府 ゆめみらい学園 高槻市立第四中学校

高槻市立第四中学校は、2010年度から校区内の2つの小学校と連携し、「社会参画力」を育む9年一貫のキャリア教育を行う。生徒に「なぜ学ぶのか」「課題と自分はどうつながっているのか」を徹底的に問い掛け、自ら学ぶ意欲を引き出している。

●9年一貫教育の背景

「学びの空洞化」が 校区の子どもの課題

「授業はどうですか」「テストは難しいですか」と好奇心に満ちた目で問い掛ける小学6年生に、中学1年生が「すぐ仲良くなれるよ」「ノートはこうやってまとめるんだよ」と丁寧に答える――。これは、高槻市立第四中学校の校区にある赤大路小学校と富田小学校の6年生が、10月の3日間、中学校に体験入学した時の様子だ。この企画・運営は、2010年度から3校が連携して行う「いま

とみらい科」の中学1年生「学校温度計をあげよう⑦」の単元で生徒が自ら行った(図1)。

同校は、2つの小学校と共に、10年度に文部科学省「研究開発学校」、高槻市の連携型小中一貫教育推進モデル校となり、小中一貫教育の研究を進めている。1980年代半ばに同校の高校進学率が低下した際、地域の幼稚園や高校も加わり「学力保障プロジェクト」が発足し、地域全体で進路保障・学力保障に取り組んできた。05年には、この活動が「四校区教育連携会議 つなぬく」に発展し、「0歳から18歳まで」を合言葉にキャリア教育と授業改善を推進し、進路保障を進めてい

School Data

◎1947(昭和22)年、富田町立中学校として開校。1957年現校名に改称。学校教育目標は「人権を大切にし、たくましく生きる、心豊かな生徒の育成」。2010年度から赤大路小学校、富田小学校と連携型小中一貫教育を行う。



校長◎沖田厚志先生

生徒数◎295人 学級数◎13学級(うち特別支援学級4)

所在地◎〒569-1144 大阪府高槻市大畑町4-4

TEL◎072-695-0404

URL◎<http://www.takatsuki-osk.ed.jp/jhs-04/>

公開研究会◎未定

る。この20年余りの連携の歴史が、小中一貫教育の研究の土台になっている。

研究に当たり、まず3校の教職員が集まり、校区の子どもの実態を話し合った。挙げた課題は、学校での学習内容に必然性を感じられない「内容のずれ」、学習方法が効果的ではない「学び方のずれ」、自信や意欲が低下し主体的に学べない「気持ちのずれ」だ。この3つを「学びの空洞化」と名付けた。

次に、子どもにどんな力を育みたいかを話し合い、①じりつする力(自分で判断しながら自分の立ち位置を見つめる力)、②考える力(課題解決に向けて必要な情報を整理・活

社会を生きる力を育む——キャリア教育の視点で教育活動を捉え直す

図1 「いまとみらい科」単元一覧表(1~3年生分抜粋)

	学校		地域・社会	
	いま・みらい	いま	みらい	みらい
1年生 50時間	学校温度計をあげよう⑦ Welcome四中 6年生の体験入学を企画	まちの温度計をあげよう、みらいのまちを考えよう⑥ 未来のまちをシミュレーション 子どもたちの笑顔があふれるまちづくり		
2年生 70時間	学校温度計をあげよう⑧ 行事改革S・U・K・G 学校行事を自分たちで改革	まちの温度計をあげよう⑥ わくわくわ〜 仕事を通してまちとつながろう まちで生き生きと働いている人と出会う	みらいのまちを考えよう⑥ 住みたいまちNO.1高槻 10年後の高槻マニフェストを考える	
3年生 70時間	学校温度計をあげよう⑨ 体育祭改革 異年齢交流を盛り込み、主体的に創る体育祭へ	まちの温度計をあげよう、みらいのまちを考えよう⑦ マイタウンミーティング 今の出会いと未来の私 自分たちの生き方やまちづくりについて考える		

「いまとみらい科」は、小学1年生~小学4年生を「前期」、小学5年生~中学1年生を「中期」、中学2~3年生を「後期」とし、9年間を通して、社会参画力の育成を目指している

*同校の資料を抜粋して編集部で作成

用する力)、③見通す力(見通しを持って課題に取り組む力)、④つながる力(人や社会とつながりつづける力)に整理し、「社会参画力」と名付けた。沖田厚志校長はこう語る。「生徒と接していて気になっていたのは、物事を判断する時、『保護者に聞いた』『友だちが言っていた』と、限られた情報で決める点です。また、思いを上手に表現できず人間関係が築けない生徒も目立ち、人とかかわり方を学ぶ必要を感じました」

また、「学ぶ意味」を見いだせない生徒が多いことも課題だった。首席の山本佐和子先

「いまとみらい科」では、「総合的な学習の時間」の学びに特別活動とキャリア教育の視点を生かし、子どもにとって、身近な社会である家庭や学校、自分の住む地域・社会から課題を見つけ出し、自分たちが出来ることを考え、働き掛けることによって、「社会参画力」の育成を目指している。

子どもがリアリティーを持って課題と向き合うためには、「学ぶ意味」を明確にして授業に臨むことが必須であり、これに徹底してこだわる学習法が、同校区が開発した「SRPDCA学習サイクル」(P.20図2)だ。まず、課題と自分の関係を見つめ(S=スタ

生は言う。「学校での学びが将来の役に立つという実感が持てていない生徒が目立ちました。『なぜ勉強をするのか』『勉強しても意味がない』という問いに、教師自身が明確に答えられないという反省もあり、学校の学習は将来につながっていることを生徒に実感させ、意欲的に学ぶ姿勢を育みたいと考えました」

「学びの空洞化」を埋め、「社会参画力」を育むため、小学1・2年の生活科の一部と小学3年から中学3年の「総合的な学習の時間」から「いまとみらい科」を創設した。

●「いまとみらい科」の工夫 課題と自分との関係を徹底的に問い 課題にリアリティーを感じさせる

ンディング)、多様な情報を収集・分析して視野を広げて解決法を考え(R=リサーチ)、計画し(P)、実行(D)する。事後は、何が出来て、何がうまくいかなかったのか「学び」を振り返り(C)、学んだことを自分の生き方に返して次の行動意欲につなげる(A)。

最も大切に行っているのが「S」だ。課題に取り組む前に、この学習が自分にとってどの



高槻市立富田小学校
榎野麻人 まさの・あさひ
小中一貫・研究担当「子どもたちのたくさんの可能性に気づき、伸ばし、高め合える教育をしていきたい」



高槻市立赤大路小学校
北畠 真 きたばたけ・まこと
小中一貫・研究担当。「子どもに対して大人に対して、教師という仕事に対して、誠実でありたい」



高槻市立第四中学校
馬場彰一 ばば・しょういち
小中一貫・研究担当。「小学校と中学校を子どもの笑顔でつなぎ、共に今と未来を切り拓く力を育みたい!」

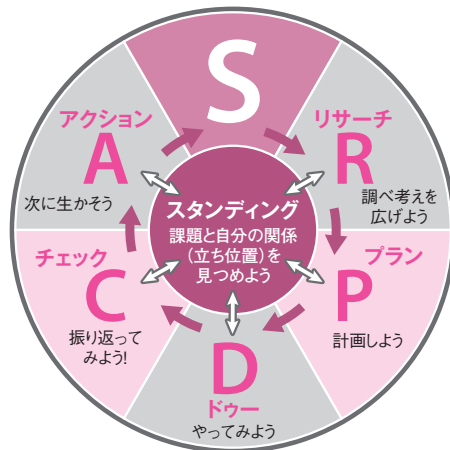


高槻市立第四中学校
山本佐和子 やまもと・さわこ
首席。「笑顔には人を動かす力がある」未来を創るこの仕事に向き合っていきたい」



高槻市立第四中学校校長
沖田厚志 おきた・あつし
子ども達の幸せのために、自分・他者・社会を見つめ、人となりが、地域社会に参画する力を育てたい」

図2 S-RPDCA学習サイクル



* 同校の資料を基に編集部で作成

ような意味があるのか、課題に対する自分の立ち位置を考え、課題解決に向けての意欲を喚起している。例えば、昨年度の単元「住みたいまちNo.1高槻」では、まず、高槻市の職員を学校に招き、少子高齢化や福祉などが市の課題であることを聞いた。その上で、高槻市を住みたいと思われる町にするために出来ることを考え、10年後の高槻市のマニフェストを作成した。

「学習意欲が低いのは、課題を自分のこととして捉えていないからだと考えています。課題にリアリティーを持てるように、市職員に話してもらいました」(山本先生)

中学3年生の「マイタウンミーティング」今の出会いと未来の私」では、全16時間の最初の3時間を「S」に当てる。この単元は、地域住民に話を聞き、未来の町づくりを考え、タウンミーティングで交流するというもの。

図3 「Sカード」

カードの表には、「ソロタイムI」でテーマと自分とのかかわりについて書く。「知っていること・知りたいこと」「経験したこと・よかったこと・成功したこと」など考える視点がかかれてる
* 同校の資料をそのまま掲載

中学2年生の「いまとみらい科」で出会った人々や中学3年生の修学旅行で出会った沖縄の人々を思い出し、更に、小学校の社会科の副読本『わたしたちの町・高槻』を見ながら、誰に会って話を聞きたいかをグループで話し合い、共有することになり時間を掛けた。

「例えば、『いじめについて考えなさい』と課題を出すと、『自分には関係ない』とまじめに取り組まない生徒が少なからずいました。課題を自分のこととして捉えない限り、傍観者で授業が終わってしまいます。課題と自分とのつながりを理解させ、リアリティーを持たせることが、生徒の意欲を喚起するために何よりも大切です」(沖田校長)

**1人で考え、グループで話し合う
この繰り返しで思考を深める**

「いまとみらい科」の授業は、自分で考え

「Rカード」というワークシートを活用する。冒頭に紹介した体験入学の企画を考える際には、ソロタイムIで「小6の時、わくわくしたこと、不安だったこと」をメモし、コミュニケーションタイムで仲間と意見を交換し、ソロタイムIIで自分なりの「おもてなしプラン」を記入した(図3)。

研究推進事務局は、ワークシートの作成だけでなく、「一貫研ニュース」を定期的に発行し、3校の全教員に配布して、活動報告や生徒の様子、地域の声などをリアルタイムで伝えている。

「『子どもがこんな顔をしていた』『地域からこういう声があった』など、活動の成果を可視化して伝えていきます。同じ取り組みでも、『来年はここを変えよう』『生徒にこういう人たちが会わせたい』というように、先生方の意欲喚起を期待しています」(山本先生)

社会を生きる力を育む——キャリア教育の視点で教育活動を捉え直す

● 取り組み継続の工夫

「いまとみらい科」の成果を教科指導に取り入れる

13年度から、小中共に、S—RPDCA学習サイクル、ソロタイムI→コミュニケーションタイム↓ソロタイムIIの過程を教科指導に取り入れ始めた。教科指導でもポイントとなるのは「S」だ。例えば、中学2年生の理科では、天気の変化を学ぶために、「この町ではチョコレートの匂いがすると雨になる」という都市伝説を解き明かすことを「S」とし、学習内容を実生活に近付けた。また、「S」と並んで重要なのが既習事項との関連を探る「R」だ。人事交流により4年前に富田小学校から赴任した馬場彰一先生は言う。

「1時間の授業で使える既習事項を『学びの倉庫』として生徒に提示し、今の学習とのつながりを意識させます。生徒に既存の知識を活用する喜びを感じさせるだけでなく、教師も今の単元がどこにつながっていて、どのように発展していくのかを意識して授業が出来るようになりました」

13年度は年3回、小中合同の「S会議」を実施した。3校の教師が各教科に分かれ、その教科を学ぶ意味や9年間の学習内容のつながり、連携の方法を話し合い、教科の存在意義や子どもに付けた力を再確認した。

こうして小中が話し合う場は大きな刺激に

なると、赤大路小学校の北畠真先生は話す。

「中学校のシステムや文化から刺激を受けることは少なくありません。何かあると学年として動ける組織力が中学校の強みだと思います。教科の専門性や指導に対するプライドも見習う点が多いと感じます」

一方、中学校にとっても、小学校の丁寧な指導が参考になるといえる。互いの良さを認め合う関係性が構築されているのも、小中連携が好調な理由の1つといえるだろう。

● 成果と課題

「学校をつくるのは自分」参画意識を高める生徒たち

小中連携を始めて4年、成果は着実に表れている。生徒へのアンケートでは、「いろいろなことについて一生懸命考えることが出来る」「自分と課題の関係を見つめることが出来る」と回答する生徒が2年間で10ポイント以上増えた。「自分の町が好きである」「いろいろな人と出会うことは楽しい」と答える生徒も8割を超える。社会問題を見つけて署名活動をしたという生徒、職場体験の事業所を見つけて交渉する生徒などが増えている。

「学校がつまらないのを他人のせいにする風潮は減り、『自分たちで行事を盛り上げたい』『昨年よりも良いものになりたい』と自ら企画・運営に参画するようになりました。学校での学びを自分のものとして受け止める意

識が高まっていると感じます」(山本先生)

馬場先生は、「根拠を持って物事を考えたり、話をしたりする生徒が多くなりました。学習サイクルの『R』の部分でアンケートやデータを根拠に考える学習を繰り返してきた成果だと思えます」と思考力や表現力の向上を指摘する。更に、中1ギャップが減少したと、富田小学校の榎野麻人先生は話す。

「本校は小規模校なので、中学校進学後、友人関係や学校生活に馴染めないと悩む卒業生が少なくありませんでした。しかし、小中連携を始めてから、卒業生の中学進学後の様子がとても落ち着き、学校が楽しいと聞くことも多くなりました」

最も大きな成果は、教師が生徒の変化を感じ、充実感を持って教育活動に取り組めるようになったことだ。

「Aさんがこんな表情をしている、Bさんが自分から周りに話し掛けている、Cさんが笑顔でありがとうと言っている。そうした生徒の様子の一つひとつが、私たちの喜びであり原動力にもなっています」(山本先生)

「小学校から本校に赴任し、初めて3年間受け持った生徒が昨年、卒業しました。その時の感動は今も心に残っています。生徒がどのような姿で義務教育を終えていくのかを常に問い続け、全力を尽くして指導に当たっていけば、本校区の教育はもっとよくなると確信しています」(馬場先生)